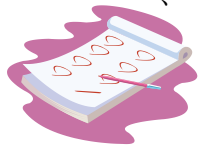


# 大学受験生へ

●もうすぐ11月。入試も秒読み段階となりました。合格したいならば、残りの時間で完全燃焼しなければなりません。合理的な勉強計画とそれを実行する気迫が不可欠です。この残り期間の勉強方法を少々考えてみましょう。

●まず、入試日から逆算して、可能な勉強時間を出してください。このとき、決して睡眠時間を削ってはなりません。一週間程度なら睡眠時間を減らしても問題ありませんが、数カ月間は不可能です。結局能率が落ちるだけで効果は上がりません。

●次に、この総勉強時間を必要科目に割り振っていくわけですが、目標は、総合点で合格最低点を一点でも上まわることです。決して入試で高得点を取ることではありません。  
 (学力に余裕のある人は別ですが、そんな人はまあ稀でしょう。) 例えば理系の人の場合、センター試験の社会で70点を取るのに15時間。



80点を取るのに50時間かかると仮定したとき、10点のために35時間かけるならば、その時間を理科にあてて理科の点数を20点上げた方が

得策であるといえます。各科目に均等に時間配分するなどは愚の骨頂です。各科目の目標点数と時間とのバランスを考えて、最も効率的な時間配分を算出しなければなりません。

●また、各単元を均等に勉強するのも時間制限がある場合得策ではありません。実際入試問題は全範囲の二割の部分から八割が出題されると言っても過言ではありません。100の単元と、それにあてる100の時間があつたと仮定したとき、各単元に一の時間を均等割するということです。最もよく出題される20の単元に80の時間をかけ、残り80の単元には20の時間をあてる。これが、限られた時間で合格点を取る秘訣です。そのためには、過去問を徹底研究してよく出題されるところをまず知らねばなりません。過去問も知らないようでは戦う前から勝負を捨てるようなものです。また、受験生の心理として、もしこの他のところから出題されたらどうしよう。だから全範囲をまんべんなくやらねばというのがあります。時間があるならば、すべての範囲をやるのがベストでしょう。しかし、限られた時間しかないときは、中途半端に全範囲をやるより、重要なところを徹底的にやる方が効率的であり、これなくしては合格点は取れません。ある意味では捨てる勇気が必要なのです。もし、出題されたら、そのとき考えればいいやくらいの開き直りが不可欠です。最後の最

後まであきらめず合格を信じて突っ走りなさい。  
 (村上)

# まず、全力投球せよ

●この時期になると、受験生はいろいろと落ち着かなくなる。勉強が順調に進んでいる者は大丈夫だが、順調に進んでいなかったり、まったく手がつかない、また自分ではやっているつもりだが成果がでない、といった者に特によく見られるようだ。ここでは、彼らに一つアドバイスをしてみたい。ただ、これは受験生に限った話ではないから、他の人も参考にして欲しい。

●それは、今やっていることに真剣に取り組むこと。こう聞けば簡単なことだが、実行するのは難しい。例えば、数学の勉強をしているとき、今解いている問題を何とか解けるようにしようと思死になっているか。「ああ、私が解けないのはこの問題じゃない。もっと難しい問題だ。」などと思っていないか。そう思っていたのでは、簡単な問題だって解けるようにはならない。そもそも難しい問題が解けないから、簡単な問題から解いているのだ。最初から難しい問題など解けるはずがない。また、ある本をやりにながら、「彼がやっている本のほうがいいかな。」などと考えないことだ。本屋に行けば、参考書・問題集は山のようにある。それを全部

やるわけにはいかない。それに、人間が一度に解ける問題は一問しかない。まず目の前にある問題を解く。それが第一歩なのだ。もちろん、一回解いたぐらいでは自分のものにはならない。その問題を見ると解法がパッと浮かび、スラスラと解ける、それぐらい繰り返して解いて初めてその問題は自分のものになる。時間制限があり、普段より緊張するテストでは、そこまですなければ点はとれない。まず、目前の問題に全力投球せよ。そして、自分のものになった問題を一つ一つ増やしていくことだ。

●そう考えれば、自分では勉強していると思っ  
 ている時間以外でも、疎かにできないことが分かるはずだ。学校の授業中でも、息抜きの時間であつても、目の前、今やっていることに真剣に取り組むのだ。学校の授業中に寝ていたり、友人と話したり、ボーッとしていたり、一体何時間無駄にしているだろう。受験に関係ない科目でも、その授業時間は真剣にその科目を勉強しよう。少なくとも、期末テストで特別な時間をとらなくても点は取れるはずだ。また、息抜きの時間は、勉強のことは考えず、心の底からリラックスしよう。



●「こう言えば、「先生、私は息抜きに命をかけた。」などという者が出てきそうだが、もちろん物事には優先順位というものがある。そ

のとき、そのときでやるべき事には適切な順番がある。それを頭にいれて、今やることに全力投球、最後のひとふんばりをしよう。

(大場)

# なる受験記

●私もかつては大学受験生であった。生来の怠惰も原因して二年も浪人した。その後の学業も余りほめられたものではなく、紆余曲折、いやいや人生そのものが紆余曲折……。そんな私の中で覚えた教訓。

①自分に甘い受験生は失敗する。  
②その気になれば人間はすごいことができる。さあ、読んでくれ。

●さて、私は、家が貧しかったので、進学は全て自力でやるしかなかった。まず、浪人が決定して九州の田舎から上京、浅草の新聞配達所に入る。



そこで新聞配達をしながら予備校に通い、捲土重来を目指す。心は燃えていた。実際に入所(塀の向こうではありません)してみると、驚いた。自分と同じ貧乏人が大勢いた。いや、私より貧乏な環境で暮らしてきた奴もいた。そして感動した。いい奴等がそろっていたのだ。それまでも友人は大勢いた

けれども、そのメンバーはそれぞれがまた新しいタイプの人間で、魅力的であった。(彼等との付き合いは、今も続いている。)東京という街も新鮮で、見るもの聞くものすべてが珍しく、私の痴的好奇心は休む暇もなかった。また、生まれて初めて給料というものを手にして、自分が使えるお金が持てたことも快感だった。進学のために蓄えをしながらも、本が好きな時に買えるようになったことで知的好奇心も満たされつつあった。仕事はハードであったが、仲間との付き合い(新聞配達所の寮で毎日宴会だった)、音楽・読書・イベントと、私の生活は満ち足りていた。ただ一点を除いて……。そう、ただ一点。

●いつしか、予備校から足は遠のいていた。学業は停滞していた。毎日の勉強時間は二時間位、まずいまずいと思いつつも、何とかなると一方で思っていた。

●時々、田舎に残っている母と祖父と弟のことが思い出された。彼等にとって私は希望の星であったのだ。その時は、「申し訳ない」と思うが、しかし、毎日の楽しい生活におぼれた。

●結果、またも浪人。ショックだった。「まさか。」と思った。しかし、振り返ってみれば、当然の報いだったのかもしれない。

甘いことばかり考えて、自分を律することができなかったのだから……。母には手紙を書いた。つらい手紙だった。そし



て、母から……。母からは電話がきた。母は、努めて明るい声を出そうとしていたが、途中から涙声が混じるのが分かった。怠惰な生活を送ってきたことを本当に申し訳ないと思っ



●二浪目の生活が始まった。バイト先を移り、その寮に住み込んでの受験勉強が始まった。今年は通信添削にかけることにし、勉強時間も増やした(それでも四時間位)。その寮での生活も快適だった。今度は、絵かきやイラストレーターといった、また別のタイプの友人が増えた。そしていつしか、私の部屋はみんなのたまり場になっていた。よく人が泊まりに来た。バイトから戻ると見知らぬ男が部屋にいたこともよくあった。「〇〇さんの紹介です……。」バイト先の人達もみな良い人で、お客さんも優しく、善意にあふれていた(私にはそう思えた)。一浪目にも増して刺激的な毎日だった。満ち足りていた……。ただ一点を除いて……。

●再び勉強がおろそかになっていた。それでも私は今度こそ何とかなると思っていた。そして新しい年が明けた。勉強は進まず何とかなると思っ、バイトと読書、他人の金で飲む宴会と友人との付き合いが一日の大半を占めた。

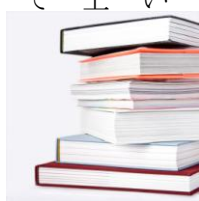
●突然、電報が届いた。一月十五日(祝)。成人の日ということ忘れていた。開けてみると母からだだった。「成人おめでとう。自分の夢に向かってがんばれ。」涙があふれた。止まらな

い。私は母のこともしばらく忘れていたのだ。「申し訳ない」と心から思った。自分が情けなかった。後悔した。精一杯生きてきた母の顔が背中が思い出された。私は決心した。今日から頑張ろうと。

●普通の人はここで頑張るのだろう。しかし私はやはり怠惰な人間だった。多少勉強時間は増えたもの予定したことの三分の一も進まなかった。そして、まだ何とかなると思っていた。そして本番……。

●結果、第一志望不合格。我が目を疑った。こんなはずではなかった。こんな思いをするために上京したのではなかった。今までのことが頭の中を駆け巡った。情けなかった。本当に情けなかった。後悔していた。今度こそ後悔していた。

●それからである。私が本気で勉強したのは。死にも狂いでやった。一日十八時間。次の受験まで二週間弱。母の電報を机に置き、友人や恩師の手紙をそのそばに置き、頑張った。今までにやったものを片っ端からやり直した。過去問も二回解いた。勉強しながら、涙がこみ上げてくることもあった。それでも歯をくいしばった。自分にこんな力があるとは思わなかった。いつしか自分に感動していた……。



●そして、とりあえずの春を迎えた。新しい生活の始まりだった。  
(小林(健))